

令和5年度 学校評価報告書（実施結果）

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月6日実施)	総合評価（3月25日実施）	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	<p>①学科併置の特色をいかし、一人ひとりの学習ニーズ、進路希望に応えることができるよう教育課程の編成を行うとともに、学校全体の教育活動において福祉の心を育む教育を展開する。</p> <p>②わかることが実感できる学びを提供し学習意欲を高め確かな学力の育成を図る。</p> <p>③福祉科では社会福祉に関する知識と技術を総合的・体験的に学習する教育を推進する。</p>	<p>①学科併置の特色をいかした教育課程の編成および評価のあり方について研究を進め、昨年度から始まった新教育課程への移行を継続して行う。</p> <p>②授業見学、研究授業・協議などを通して、組織的な授業改善の取組を継続し、授業のユニバーサルデザインを図り、わかる授業づくりを進め、確かな学力の育成を図る。</p>	<p>①両科の共通理解を図りながら、新教育課程の授業の進め方や評価基準の設定、評価方法の検討をさらに進める。</p> <p>②授業見学、研究授業・協議などを通して、組織的な授業改善の取組を継続し、授業のユニバーサルデザインを図ると共に「みなみスタイル」の充実化をさらに促進する。</p>	<p>①学科の特色に合わせた評価基準の策定及び選択科目の設置、加えて評価方法等に関する研修会を実施できたか。（実施状況）</p> <p>②授業見学・研究授業を一人1回以上見学して、職員全体の研修を行い、わかりやすい授業づくりを推進するなど「みなみスタイル」を充実できたか。（授業評価）</p>	<p>①両科それぞれの特徴に合わせた評価基準と選択科目の設置を行った。</p> <p>①来年度より始まる新カリキュラム完全移行に向け、新しい成績処理シートの導入など入念に準備を行った。</p> <p>②研修会、授業見学、研究授業・研究協議を行い、わかりやすい授業づくりを推進し、「みなみスタイル」の充実化を図ることができた。</p>	<p>①新カリキュラムへの移行が3学年出そろうことで、改めて福祉科・普通科における教育課程の問題点や改善点の検討に入り、学科併置の強みを生かしていきたい。</p> <p>②着任者にも「みなみスタイル」をすぐ取り入れられるようにわかりやすい研修会を行う。</p> <p>②「みなみスタイル」の中で学校として統一して行っていく内容を精査する。</p>	<p>①来年度の新カリキュラム完全移行に向けて、万全な準備をおこなった。</p> <p>学科併置の強みを生かしつつ、協働的な学びを大切にしながら教育課程を実施してほしい。</p> <p>②授業評価が全教科「3」以上であることから、教員全体の研修等の取組を通して、「みなみスタイル」の充実化を図ることができたが、どこまで統一した指導を行うかの検討が必要である。</p>	<p>①両科の共通理解を図りながら、学科並置の特色を生かした教育課程を編成することができた。全学年で新教育課程を実施、検証しながら、さらに充実した教育課程となるよう検討を重ねていく必要がある。</p> <p>また、新成績処理シートが円滑に運用できるようにしていく必要がある。</p> <p>②全教員が授業見学や研究授業・研究協議を行い、わかりやすい授業づくりを推進し、本校の授業指針である「みなみスタイル」の充実化を図ることができたが、どこまで統一した指導を行うかの検討が必要である。</p> <p>②新着任者へのわかりやすい「みなみスタイル」の説明を行うとともに、今年度の重点項目を設定するなどして、全職員で「みなみスタイル」を推進する。</p>	
2 (幼児・児童・)生徒指導・支援	<p>①生徒の社会化を図るとともに、安全・安心に学べる環境を整えるため、ルール、マナーを大切にす規範意識の醸成を図る。</p> <p>②生徒の状況を的確に把握し、さまざまな課題を抱える生徒に対して一人ひとりに応じた適切な配慮や支援を学校全体で行う体制を整える。</p>	<p>①理解にもとづく規範意識の育成のため、より生徒との接触の機会を増やして、常に身近な立ち位置で、支援に力点を置いた生活指導をめざす。</p> <p>②支援が必要な生徒の早期発見および初期対応を組織的に行うことで解決・再発防止に努める。また、SC、SSWとの連携をさらに深める。</p>	<p>①可能な限り、生徒に接触できるような機能に変えた各種当番の意識を職員に対して常に発信し、指導と支援の連携を図る。</p> <p>②学年会等で生徒情報をこまめに報告し、週1回開催するコーディネーター会議で共有し、必要に応じてケース会議等を開催する。SC、SSWとの振り返りを充実させ今後の支援に繋げる。</p>	<p>①より身近な位置で生徒との接触を図り、規範意識の向上に資することができたか。指導と支援の連携を高めることで、効果的な生徒指導ができたか。（アンケート）</p> <p>②学年会で生徒情報が報告され、その情報をコーディネーター会議で共有できたか。SC、SSWとの振り返りを行い、その後の支援に繋がることができたか。（アンケート）</p>	<p>①日常生活指導において、個々の生徒の特質への理解を深めつつも全体の生徒への配慮やバランスを考慮して、頻りに生徒への接触の機会をとらえて、生徒の意識の変容を促し、行動の変化につなげることができた。</p> <p>サポートドッグ等の結果を踏まえ、問題を抱える生徒を事前に把握することで、問題行動に至る前の、予防的措置を取ることができた。</p> <p>②学年会やコーディネーター会議で常に生徒のさまざまな情報を共有し、SC・SSW・外部機関に繋げることができた。</p>	<p>①新校立ち上げから4年が経過し、多数の職員が入れ替わった結果、指導に対する職員の意識のばらつきが大きくなり、学校一体とした指導を取りにくい現状であり、サポートドッグを所管する支援グループとの連携もうまくいっていない状況である。</p> <p>研修会・学年会等の各種打合せの中で職員の共通理解をはかる一層の努力が必要であろう。</p> <p>②支援を要する生徒数も多く、情報共有だけで終わることあるため、コーディネーター会議の運営方法も検討が必要。</p> <p>職員研修の実施により全職員の教育相談力の底上げを図る。</p>	<p>①一人ひとりの生徒の特性理解を図ると同時に、全体への配慮も行いながら丁寧な指導を行っている。</p> <p>生徒の規範意識については学校だけでなく、地域住民も青少年の育成に関わることが大切である。しかし、同時に外部の者が携わることにも難しさを感じている。</p> <p>②教員間の情報共有により、支援を要する生徒をSC・SSWまた外部機関につなげることができている。</p>	<p>①可能な限り生徒との接触を図り、個々の生徒の特質への理解を深めつつも全体の生徒への配慮やバランスを考慮して指導を行うことができた。</p> <p>生徒支援グループとの連携においては更に連携を密にして生徒情報の共有を図り、問題行動の未然防止に繋げる必要がある。</p> <p>②組織的な支援体制が定着しつつあり、効果的な支援につなげることができた。生徒や家庭を取り巻く環境が複雑化しているため、外部の行政機関や医療機関と更に緊密な連携を図っていく必要がある。</p> <p>②より迅速で効果的な支援を行うため、コーディネーター会議では生徒の各情報共有とともに、支援方法の検討も行う。また、新着任の教員にも本校の支援体制を理解してもらうために研修会を実施する。</p>	

視点	4年間の目標 (令和2年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月6日実施)	総合評価(3月25日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3 進路指導・支援	・生徒が主体的に進路を選択できるよう、豊かな人間性や社会的、職業的自立に向けたキャリア教育を充実させる。	・連続した高校3年間のキャリア教育プログラムの再構築に取り組む。	①前年度にまとめたキャリア教育プログラムの試行・検証を通してプログラムの再構築を図る。 ②このプログラムの実践を通して生徒の社会的・職業的自立と主体的な進路選択を可能にする力を育む。	①連続した高校3年間のキャリア教育プログラムは再構築できたか。(実施状況) ②地域企業や関係諸機関と連携し、生徒の主体的な進路選択につながる段階的なガイダンスや情報発信ができたか。また、進路実績の維持向上は実現できたか。(進路実績)	①グループワークと進路ガイダンスを折り込んだキャリア教育プログラムの体系化に取り組み、完成した。 ②地域企業や関係諸機関と連携し、進路選択に有効なガイダンスを実施した。進路実績は90%を超えた。	①キャリア教育プログラムの検証の継続と指導案の整理・作成を行う。 ②進路案内や企業案内など、進路情報の効果的な提供方法を工夫し、進路実績の維持向上に努める。	①キャリア教育プログラムを体系にまとめ、完成させたことは評価できる。そのプログラムの実施・検証を繰り返し、生徒の社会的・職業的自立を促してほしい。また、高大連携なども視野に取れた取り組みも促進できると良い。	①高校3年間をととした普通科のキャリア教育プログラムを完成させた。プログラムを進めながら、さらに充実した取組になるよう検討を重ねていく必要がある。併せて福祉科のプログラムも完成させたい。 ②1年次より地域企業や関係諸機関による進路ガイダンスを実施して、段階的、具体的な情報発信により生徒が主体的に進路活動に取り組むようになった。今後取り組みを継続させていく必要がある。	①普通科はプログラムを実行しながら、課題や改善点について検討を進める。また、福祉科のこれまでのキャリア教育を尊重しながら、普通科と共通のプログラムのあり方を検討する。 ②プログラムに沿った3年間をととした進路ガイダンスを実施することにより、生徒の希望する進路実現をさらに確実なものにしていく。
4 地域等との協働	・地域の教育的資源を積極的に活用し、体験的な学びを通して人や社会との関わりを大切にすることを育成するとともに、地域に応援される学校作りを進める。	①「ともに支え合う心」が育める協働の仕組み・手立てを再構築する。 ②広報活動を通して保護者や地域の方々に学校の取組に対する理解を深めてもらう。	①PTAと共通通学路清掃など地域貢献活動を行う。 ②学校説明会等を通じて地域に対する学校の取組への理解を深めるとともに、生徒のリーダーシップやコミュニケーション能力の育成のため、生徒による説明を実施する。	①PTAと協働した地域貢献活動が実施できたか。(実績) ②学校説明会等を通じて学校の取組への理解を深められたか。また、生徒が直接説明を行うことができたか。(アンケート)	①PTAに呼びかけ少数人数が一緒に通学路清掃を行った。また、学校整備事業として生徒・PTA・教職員が協同して生徒昇降口の清掃活動を行った。 ②産業教育フェアにおいて生徒自ら施設と連携し販売活動を実現できた。 ③中学校からの要望に積極的に応え、中学校での進路説明会で広報を行った。	①通学路清掃時等に、挨拶など地域の方々とコミュニケーションを図ることを目標に加える。 ②産業教育フェアでの施設連携をさらに充実させ、リーダー育成につなげる。 ③中学校に出向く進路説明会での広報活動を充実させる。	①各取組を通して、PTAや地域と連携した活動を行っている。 ②学校説明会や中学校訪問を通じて学校の取組への理解を深めている。福祉科がメディアに取り上げられたことなども宣伝していくとよい。	①地域貢献活動を実施する際に保護者にも通知して協働した取組としたが、参加する保護者が少なく、実施計画や通知方法の検討が必要である。 ②学校説明会で生徒による説明がわかりやすかったとアンケートに多数の意見があった。 ③中学校訪問による学校説明を含めて、ホームページ以外にも本校の教育活動をPRする方法の検討が必要がある。	①地域貢献活動の計画を早期に立て、保護者への通知やPTA運営委員会等において情報提供および回収を図る。 ②学校説明会や産業教育フェアでは、生徒による取組を継続して実施していく。 ③マチコミによる保護者への周知、町内会への情報提供などを行っている。
5 学校管理 学校運営	①生徒が安全・安心に学ぶための防災計画策定や安全管理及び施設設備等の環境整備を進める。 ②職員が学校教育目標を共有し、風通しのよい職場環境を構築することで事故・不祥事を防止し信頼に根ざした学校運営を推進する。	①生徒が安全・安心に学べるよう施設設備等の点検・整備や危機管理の改正、活動の支援を進める。 ②職員が学校教育目標を共有し、学校運営協議会や部会での協議を通して、具体的な取組を行う。	①施設設備等の効率的な管理、防災・減災、不審者対応の見直し、ワークフローの効率化を進める。 ②学校運営協議会の福祉部会、クリエイティブ部会を活用して具体的な取組の検討・実施を図る。 ③指定研究事業(SDGs)や「みなみスタイル」の内容を共有するため、研修会や教員の意見交換・共有のための会議(みなみハート会議)を年度行事に組み込み、計画的に取組を行う。	①生徒・教職員のさまざまな活動を安全かつ効果的に支援できていたか。(アンケート) ②福祉部会・クリエイティブ部会を活用して具体的な取組を行い、学校運営に活かすことができたか。(具体的な取組) ③指定研究事業(SDGs)や「みなみスタイル」の内容を共有するための研修会や「みなみハート会議」を通し、「みなみスタイル」の共通理解を図れたか。(授業評価・アンケート)	①安全管理及び施設整備等の環境整備を進め、防災計画を整備し、生徒・教職員を支援できた。 ②学校運営協議会の全体会や各部会を活用して具体的な取組を行い、学校運営に活かすことができた。 ③「みなみハート会議」を通して、教員の共通意識を高めることができた。年度行事に組み込むことで円滑な運営ができた。指定校研究事業(SDGs)については、「よこすか★いいねエコ活動賞」を受賞した。	①教育活動のICT化に対応しスムーズな運用ができるよう細部にわたって整備した。 ②具体的な取り組みとして、放課後の学習教室「みなまな部」の運営方法について再度検討する。 ③「みなみハート会議」の議題について管理職やグループだけでなく、職員からの声も聴けるような仕組みづくりを模索する。指定校研究事業(SDGs)最終年度に向けて、学校全体での取り組みを促す。	①安全管理及び施設の点検や整備を通して、防災計画を整備し、生徒・教職員を支援できた。 ②放課後の学習教室「みなまな部」について、生徒の参加が増えるような工夫をする必要がある。 ③各取組により指定研究事業(SDGs)「みなみスタイル」の内容共有ができた。	①「学校防災活動マニュアル」や「危機管理マニュアル」を策定するとともに、校内の施設・設備の管理をこまめに行うことができた。今後も継続した取り組みが必要である。 ②放課後学習支援「みなまな部」への参加者が増えないため、参加を促す取り組みについて検討が必要がある。 ③「みなみハート会議」を年間4回開催して全職員の意見を共有し、「みなみスタイル」の充実と繋がることができた。SDGsを中心とした指定研究事業では文化祭等とおして学校全体の取組としたが、研究指定は来年度で終了するため、今後この取組をどのように継続するかが課題である。	①災害はいつ何時起こるかわからないので、繰り返し訓練を行い、いざという時に混乱することがないように努める。また、地域との協働による避難訓練を検討する。 ②「みなまな部」の継続発展について取り組んだ結果を踏まえて、学校運営協議会や教員全体で検討する機会を設ける。 ③今年度も複数回「みなみハート会議」を開催して授業や評価方法、生徒指導の在り方等職員の共通理解を経て「みなみスタイル」の改善、充実に努める。SDGsへの取組を行事や教科で継続した対応ができるよう検討する。